

学校におけるネットワーク倫理教育の必要性

4 S - 6

柴田恵美子¹ 村田孝子² 松野浩嗣¹¹山口大学理学部²山口大学総合情報処理センター

1. まえがき

パーソナルコンピュータの学校への導入が急ピッチで進められている。また、全ての学校にインターネットを導入する計画も進行中である。

本稿ではまず、小、中学校においてインターネットが導入されたときに起こり得る状況について考える。次に、インターネットの意義を全社会的立場で捉えなおした後で、学校におけるネットワーク倫理教育の必要性について論じる。

2. 学校現場でのネットワーク実践

小中学校におけるパーソナルコンピュータ（パソコン）を用いた実践は古くから多く行われてきた。1985年から1990年ごろまではMS-DOSによるコマンドベースの利用が難解であったため、わずかな実践例しかなかったが、MacOSやWindows3.1などのGUI環境の登場によってパソコンが格段に利用しやすくなり、多くの実践が行われるようになった。

最近のパソコンの利用形態は、スタンドアロン型からインターネットによるネットワーク型に移行してきている。このような状況から、文部省は平成15年までに全国の公立学校をインターネットに接続し、中・高等学校においては一人一台のパソコンを備えた教室を全校に設置する計画を明確に打ち出している^[1]。

これまでのパソコンによる教育実践は「パソコンに対して相当のスキルをもった教師」によって行われているものがほとんどである。言い換えれば「パソコンをよく知った教師のいる学校でしかパソコンによる教育実践は行われな

い」ということであり、これは教育界においても自然に受け入れられる通念であろう。

ところが最近、このような通念と異なる視点の実践が行われている^[2]。この実践ではパソコンを「さりげなく教室におく」ことからスタートし、それをとりまく小学生の関心の進展を観察している。ここで指導す

る教師自身がパソコンの利用技術にたけているわけではない。現時点ではパソコン指導を苦手としている教師が大多数であるという現実を考慮すると、この教室の実践は「普通の学校」におけるパソコン教育のさきがけとして位置づけることができる。

ここで我々が注目しているのは、この実践では、パソコンの利用方法がお絵かきツールの利用などのスタンドアロン型から、フロッピーディスクによる学校間通信、さらにはパソコン通信による学校間通信へと発展していることである。これまでのコンピュータの一般的な利用形態の変遷と同じ経過が、小学校の一教室で再現されているという点が非常に興味深い。

このような状況の中で、学校にインターネットが導入された場合、インターネットを用いた実践を教師が指向していくことは自然な流れであろう。

3. ネットワーク倫理教育の必要性

現在の一般的なインターネット参加ユーザの姿勢を見ていると、概ねはインターネットのアプリケーションを使えばそれによしとするユーザが多い。おそらく学校現場における授業や課外活動にインターネットが導入されても同様であろう。昨今のインターネット上では多くの倫理的障害が投げかけられているが[文献?,3]、学校現場でこれに対処するために教師たちがとりうる行動として、単に法的規制を望む立場にたつものがクローズアップされてくる危険性がある。

一方、インターネットはその起源から今日まで「ネットワーク上の行為は、思想の自由、表現の自由という基本的人権の保証の上になりたつ」といういわば「インターネット上の自由の精神」を抛り所にして発展してきた。

いわゆるパソコン教育は、アプリケーションの教授を行うことが第一義的な目的である。しかし、スタンドアロンの使い方だけでなく、ネットワーク型の利用形態をも教授の対象にするならば、多少なりともインターネットの成り立ち・精神、ネットワークの仕組みなどを教師

が理解しておく必要がある。

インターネットの重要さはその技術的な意味合いにあるのだけではなく、これまでのメディアにないポリシーをもつ社会的通信基盤であることが重要なのであり、倫理的障害に対して全てを既成の法で解決しようとする態度はインターネットの存在価値自体をなくしてしまう恐れがある。

インターネット、またはその発展型がこれからの重要な社会的基盤のひとつになっていくことは間違いない。学校へのインターネット接続はその基盤整備の第一歩として位置づけることができる。

そこで我々は、この基盤の上になりつつネットワーク社会のリーダーシップを担っていく学生に対して、いままで行ってきた単なる情報処理教育のみならず、倫理教育を含めたネットワーク教育を考えていく必要がある。

これらのことを背景として、我々は、昨年度からネットワーク倫理教育の一環として「インターネット上の倫理意識調査」というアンケートを行い、学生のネットワーク倫理認識度を調べ、それら調査の結果を如何に教育に反映させていくかを研究している。アンケートは、第1回目が1997年の12月から2月に行われ、第2回目が1998年6月から7月にかけて行われた。

現在の実社会では、内容が反芻できる従来の手紙やはがきと異なり、電子メールの即時性が裏目に出ている現象として文献[4]、[5]などで紹介されているように、攻撃的メールの応酬問題が起こっている。インターネット上のアプリケーションとして最も基本的なツールであり大学の授業の中でも必ず教えられる電子メールに焦点をあて、調査結果の一部を用いて考察してみた。有効サンプルは、655件であった。

設問「他人を傷つけるメールを送る行為」に対して
「認められない 88.64%」

設問「攻撃的なメールへの対処」に対しては
「しばらく様子を見てから

返事を書く 14.65%」

「返事を出さず無視をする 49.92%」

という回答結果になった。この結果から学生のフレーミングメールに対する受信時送信時の態度は、かなり慎重でモラル意識はそれほど低いとは考えられない。

このような結果となった理由として、この設問へは電子メールをいわゆる「手紙」のアナロジーとして捉えて回答していることが考えられ

る。ところが文献[4]にあるように、手紙では起こりえないような人間の間の泥沼的応酬が電子メール上のコミュニケーションで頻繁に起こることは、電子メールを使ったことのある人であれば、直接的ではないにせよ関わったことのある人が多いと思われる。

この理由として考えられるのが、電子メールの「手軽さ」と「即時性」である。手紙は、比較的周到な準備を行ったのちに書き始めることが普通であるのに対し、電子メールはこの準備を行わずに手軽に書くことが多い。また、手紙では相手からの返事を受けるのに最低でも数日間を要するが、電子メールは瞬時にレスポンスを得ることができる。実際、文献[4]では、わずか2日間の間に手紙ではなしえないメールの応酬がなされたとある。

インターネットの最も基本的なツールである電子メールにおいてさえ、これまでの既成のコミュニケーション手段では起こり得ない状況を作り出すことをここに見ることができる。

インターネットという既成概念にとらわれない、さらにはとらわれてはならないコミュニケーション手段を手にした我々は、この上でのネットワーク社会を生きていくためのモラルを意識しておく必要がある。学校現場におけるインターネットの導入が確実になった今が、ネットワーク倫理に関する教育方法について検討すべき時期である。

4. あとがき

インターネットの及ぼす社会的影響が大きいことはよく認知されている。これからは、その自由の精神やモラルに関しての学校での教育がますます重要になってくるであろう。これからも今回行ったアンケート結果をもとに考察を深めたいと考えている。

文献

- [1] 教育改革プログラム(平成10年4月28日(改訂))、文部省、<http://www.monbu.go.jp/series/00000030/#02>
- [2] 田中、石井；コンピュータで始まったこと(子どものネットワークづくり)、佐伯・中西・若狭(編)・フレネの教室1学びの共同体、pp.69-116、青木書店、1996。
- [3] 川本、高田；情報が凶器に変わる日—匿名ネット社会を考える、朝日新聞、
- [4] 坂本哲史；メールでトラブル(社内メール会話が陥る「罠」)、AERA 1998.7.20, pp.52-55, 1998。
- [5] 電子メール、何故トラブル、感情を高ぶったまま送信：日本経済新聞、1997.10.16。